

# 米国



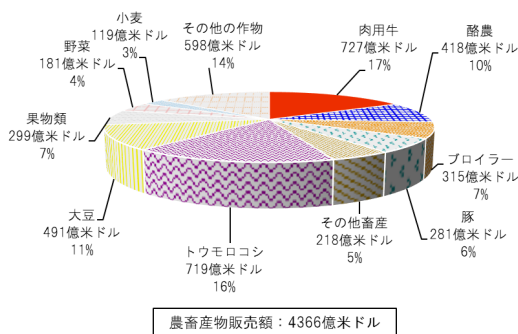
## 1 農・畜産業の概況

米国経済における農業の位置付けは、他産業の発展に伴い低下傾向にあり、2021年の国内総生産（GDP）に占める農業生産の割合は4.5%となった。

21年の農業経営体数（農畜産物の年間販売額1000米ドル以上）は、前年比0.3%減の201万2000戸、農用地面積は同0.1%減の8億9530万エーカー（3億6232万ヘクタール）となった。1経営体当たりの農用地面積は、同0.2%増の445エーカー（180ヘクタール）であった。また、年間10万米ドル以上の農畜産物販売実績のある経営体は全体の18.5%となり、全農用地面積の69.9%（同0.2%増）を占めるなど大規模化が進んでいる。

21年の農畜産物販売額（現金収入。自家消費分を除く）は、4336億米ドルと前年を20.1%上回った（図1）。

図1 農畜産物販売額（2021年）

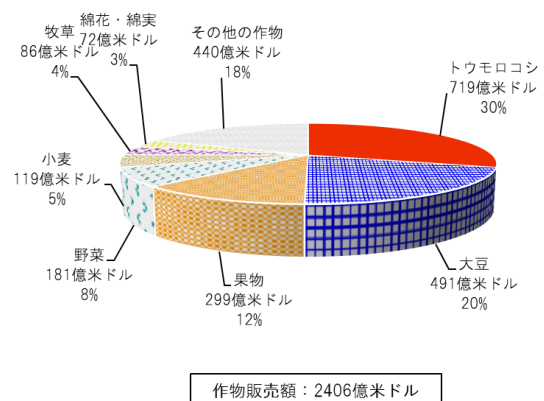


資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

部門別に見ると、作物部門は同20.9%増の2406億米ドルとなった（図2）。このうち、生産量の約4割が家畜飼料に仕向けられるトウモロコシは、719億米ドル（作物部門に占める割合は29.9%）と最大を占めた。次いで、大豆が491億米ドル（同20.4%）、果物が299億米ドル（同12.4%）、野菜が181億米ドル（同7.5%）となった。

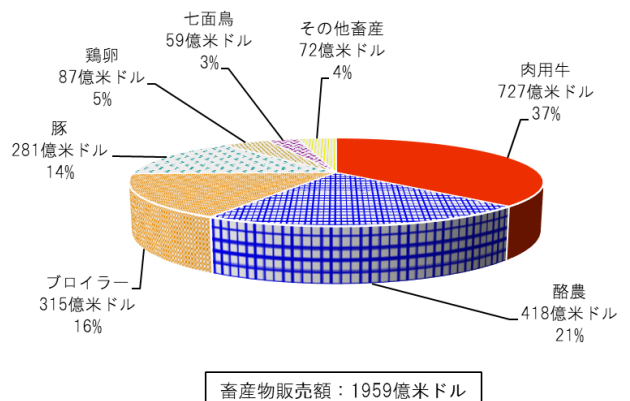
畜産部門は、同19.2%増の1959億米ドル（農畜産物販売額に占める割合は44.9%）となった（図3）。この内訳を見ると、肉用牛が727億米ドルと畜産部門の37.1%を占めた。次いで、酪農が418億米ドル（畜産部門に占める割合は21.3%）、ブロイラーが315億米ドル（同16.1%）、豚が281億米ドル（同14.3%）となった。

図2 作物販売額（2021年）



資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

図3 畜産物販売額（2021年）



資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

## 2 畜産の動向

### (1) 酪農・乳業

米国は、年間1億トン近くの生乳を生産する世界最大級の酪農国である。ただし、国内に巨大な消費市場を抱えていることなどから、国際乳製品市場での米国の位置付けは、さほど高くはない。

#### ① 主要な政策

2018年農業法下（～2023年9月まで適用）での酪農の主な制度には、連邦生乳マーケティング・オーダー制度（FMMO）、酪農マージン保証プログラム（DMC）、牛乳寄贈プログラム（MDP）がある。

FMMOは、オーダー（生乳取引地域）内で取引される生乳については、飲用向け1分類と加工向け3分類の計4分類の用途に分け、それぞれの最低取引価格が設定されている。また、生乳取扱業者に対し、生産者へのプール乳価（用途別乳価を加重平均した乳価）支払いも義務付けている。これにより、生産者に対して安定的な収入の確保を可能にするとともに、消費者に対して合理的な価格での牛乳・乳製品の供給を目的としている。2000年1月からは、①オーダー数の再編統合（当初の31地域が段階的に統合され、04年4月から10地域に）②生乳の用途区分の再分類（3区分から4区分に）③最低取引価格の設定に当たり、従来の基礎公式価格（BFP）に代えて、多成分価格形成システムに基づく新基礎価格の導入—などの変更が加えられた。

DMCは、2018年農業法で、酪農マージン保護プログラム（MPP）に代わる生産者のセーフティネットとして創設された制度である。DMCはMPPと同様、補填<sup>てん</sup>の指標に飼料費を加味し、乳価と飼料費の差を生産者の収益（マージン）とし、掛け率に応じて補償することにより、再生産を確保することを目的としている。DMCでは、補填の発動条件の緩和などセーフティネットとしての機能が改善されている。

またMDPは、2018年農業法で従前の乳製品寄贈プログラム（DPDP）の代わりとして創設された制度である。これは、生産者や加工業者などが低所得者層へ

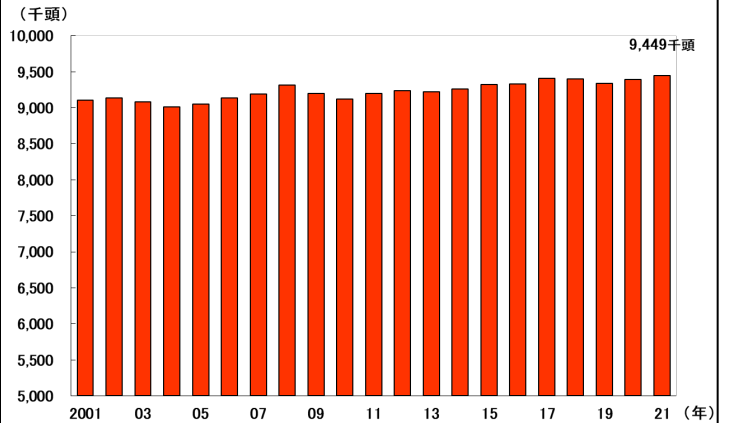
の食料支援として牛乳を公共団体などに寄贈するものであり、発生した費用は政府から払い戻しを受けるという、DPDPをより簡易化した制度となっている。

#### ② 生乳の生産動向

##### ア 飼養頭数

搾乳牛飼養頭数は、1980年代中ごろから一貫して減少傾向で推移してきたが、99年に下げ止まった後は、小幅な増減を繰り返している。2021年の搾乳牛飼養頭数は、前年比0.6%増の944万9000頭となった（図4）。

図4 乳用経産牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Milk Production, Disposition, and Income」

##### イ 生産量

2021年の生乳生産量は、搾乳牛頭数が前年比0.6%増となったことや、1頭当たり乳量の増加により、1億263万トン（前年比1.4%増）とわずかに増加し、12年連続で前年を上回った（表1）。

表1 生乳・乳製品の生産量の推移

(単位：千トン)

区分/年	2017	18	19	20	21
生乳	97,761	98,690	99,056	101,250	102,629
バター	838	893	905	973	936
脱脂粉乳	832	806	840	892	918
チーズ	5,733	5,914	5,959	6,005	6,242

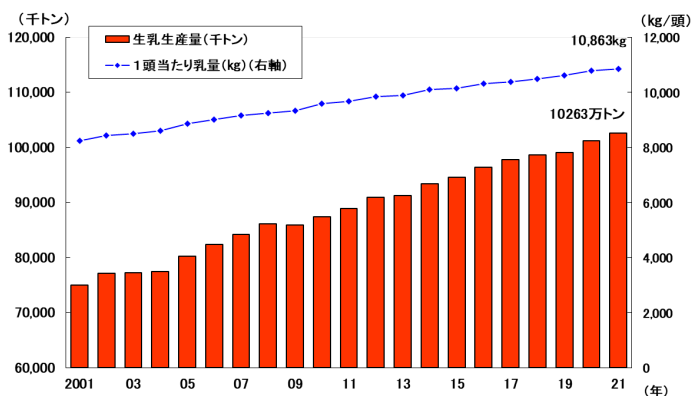
資料：USDA「Milk Production」、「Dairy Products」

注：チーズはカッテージチーズを除く。

### ウ 搾乳牛1頭当たり乳量

搾乳牛1頭当たり乳量は、遺伝的改良などにより増加傾向で推移しており、2021年は、1万863キログラム(前年比0.7%増)とわずかに増加した(図5)。

図5 生乳生産量と1頭当たり乳量の推移



資料: USDA「Milk Production, Disposition and Income」

### エ 地域別生産動向

生乳生産量の5割強は上位5州(カリフォルニア、ウィスコンシン、アイダホ、テキサス、ニューヨーク)で占められており、上位10州(上位5州にミシガン、ミネソタ、ペンシルバニア、ニューメキシコ、ワシントンを加える)で見ると、全体の約7割を占めている。

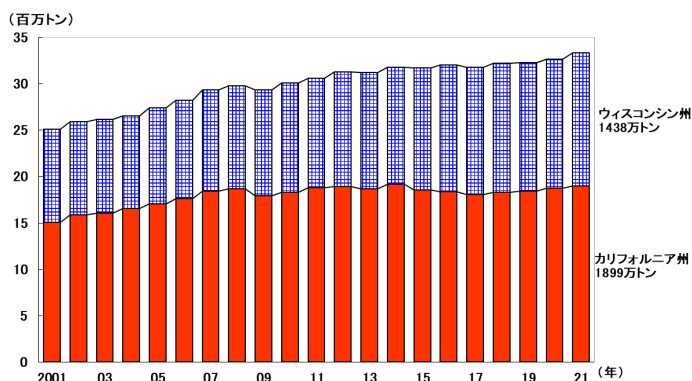
一部の州では、移民を主体とした安価な労働力を活用した大規模化が進んでいる。その代表であるカリフォルニア州は、1993年にウィスコンシン州を抜いて国内最大の生乳生産州となり、以降も増加基調で推移してきた。

しかし、2009年には前年終盤の輸出価格の暴落を受けて1792万トン(前年比4.1%減)に減少した(図6)。その後は増減を繰り返しながらも1800万~1900万トン程度で推移しており、21年は1898万9000トン(同1.4%増)となった。また、生乳生産量第2位のウィスコンシン州は、21年に1438万トン(同3.2%増)とやや増加した。



写真1 酪農家での乳牛飼養の様子

図6 カリフォルニア州およびウィスコンシン州の生乳生産量の推移



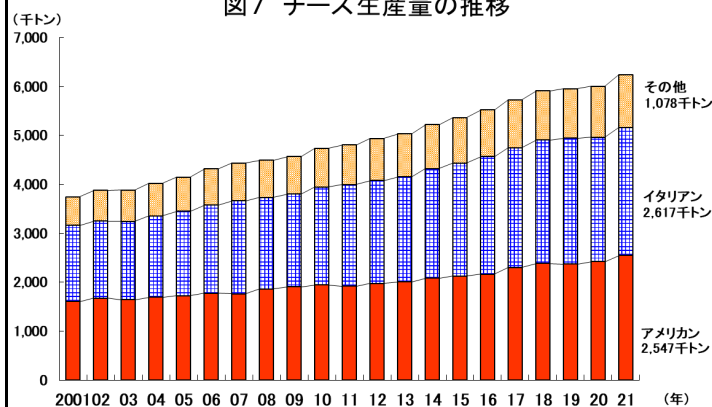
資料: USDA「Milk Production, Disposition and Income」

## ③ 牛乳・乳製品の需給動向

### ア 生産動向

2021年のチーズの生産量(カッテージチーズを除く)は、前年比3.9%増の624万2000トンとなった(図7)。堅調な需要により、生産量は過去20年以上にわたって増加基調で推移している。このうち、21年のチェダーチーズを中心とするアメリカンタイプ<sup>(注1)</sup>の生産量は、254万7000トン(同5.2%増)、モッツアレラチーズなどイタリアンタイプ<sup>(注2)</sup>は、261万7000トン(同2.8%増)となった。

図7 チーズ生産量の推移



資料: USDA「Dairy Products」

同年のチーズ生産量に占める種類別の割合は、アメリカンタイプが40.8%(同0.5ポイント増)、イタリアンタイプが41.9%(同0.8ポイント減)となった。

また、バターの生産量は93万6000トン(同3.8%減)となり、脱脂粉乳の生産量は91万8000トン(同2.9%増)となった。バターおよび脱脂粉乳ともにカリフォルニア州が最大の生産州であり、全米の33%、44%をそれぞれ生産している。

(注1) アメリカンタイプには、チェダー、コルビー、モントレージャックなどを含む

(注2) イタリアンタイプには、モッツアレラ、パルメザン、プロヴォローネ、リコッタ、ロマーリオなどを含む。

### イ 消費動向

1人当たり飲用乳消費量（製品ベース、以下同じ）は、植物を原料とした飲料の台頭など多種多様な飲料との競合により近年減少傾向で推移しており、2021年は60.8キログラム（前年比5.0%減）となった。飲用乳については、乳脂肪が必ずしも体に悪影響を及ぼすものではないとの認識が広まっていることなどから、低脂肪牛乳や無脂肪牛乳など低脂肪タイプの消費量が減少する一方、全脂牛乳（いわゆる普通の牛乳）の消費が伸びているものの、シェアは低脂肪タイプより小さい。

1人当たりチーズ消費量（カッテージチーズを除く）は、近年増加傾向で推移しており、21年は17.8キログラム（同3.7%増）となった。また、1人当たりバター消費量は2.9キログラム（同1.9%増）となった。

## ④ 牛乳乳製品の価格動向

### ア 生乳価格

2021年の生乳の生産者販売価格は、乳製品価格の上昇に伴い、100ポンド当たり18.6米ドル（前年比2.8%高）とわずかに上昇した（表2）。

表2 生乳の生産者販売価格の推移

（単位：米ドル/百ポンド）

区分/年	2017	18	19	20	21
生乳平均価格	17.70	16.30	18.70	18.10	18.60

資料：USDA「Agricultural Price」

### イ 乳製品の卸売価格

2021年の乳製品の卸売価格は、チーズへの生乳仕向け量が増加したことなどから、減産となったバターは1ポンド当たり174.5セント（同10.6%高）、海外需要に支えられた脱脂粉乳は同130.9セント（同24.0%高）、増産となったチェダーチーズは199.9セント（同12.7%安）となった（表3）。

表3 乳製品の卸売価格の推移

（単位：セント/ポンド）

区分/年	2017	18	19	20	21
バター	232.8	225.0	223.0	157.8	174.5
脱脂粉乳	85.6	80.5	105.6	105.6	130.9
チェダーチーズ	190.3	183.6	206.0	229.1	199.9

資料：USDA「Dairy Market News」

注1：バターはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格（グレードAA）。

注2：脱脂粉乳は西部のFOB価格。

注3：チーズはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格。

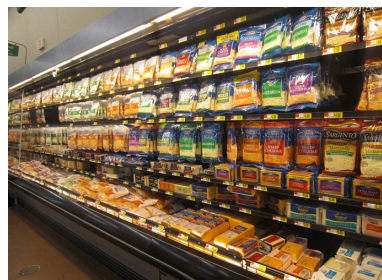


写真2 小売店でのチーズの陳列風景

## (2) 肉牛・牛肉産業

米国は、世界の牛肉生産量の約2割を占める最大の牛肉生産国であると同時に、世界最大の牛肉輸入国でもある。また、農畜産物販売額に占める肉用牛関係の割合は最大となっており、米国農業の中で最も重要な部門の一つと言える。

肉用子牛生産は、家族経営による生産・管理が行われる一方、肉用牛の肥育に関しては、大規模なフィードロットで効率的な穀物肥育が行われている。また、肉牛の処理・流通面では、大手パッカー（食肉企業）による寡占化が顕著となっている。

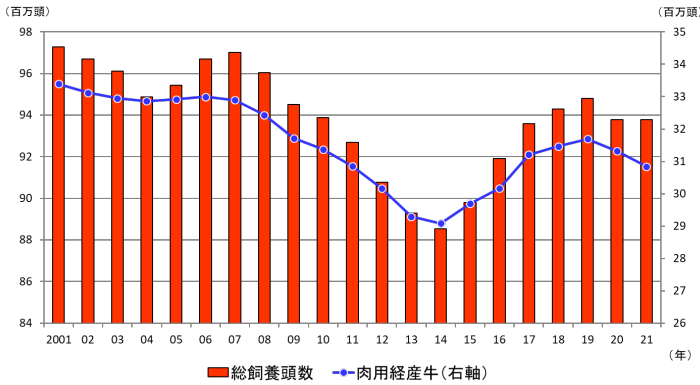
### ① 肉牛の生産動向

総飼養頭数は、2006年後半以降の飼料コスト高や11年以降の干ばつなどにより、肉用牛繁殖経営の収益性が悪化し、繁殖雌牛を中心に淘汰が進んだことから減少した。しかし、14年を底に草地の状態が改善され、牛群再構築が進展したことにより増加に転じた（図8）。

19年までこの傾向は継続したが、20年は干ばつによって繁殖雌牛の淘汰が進み減少に転じた。21年の総飼養頭数は9379万頭（前年同月比増減なし）となった。

同年の飼養頭数の内訳を見ると、肉用経産牛は同1.5%減の3084万4000頭、500ポンド（約227キログラム）以上の肉用繁殖後継牛（未經産牛）は、581万2000頭（同0.1%増）と前年並みとなった。また、同年の子牛生産頭数（乳用種を含む）は、同1.2%減の3508万5000頭となった。

図8 牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Cattle」  
注：各年1月1日現在。



写真3 フィードロットの風景

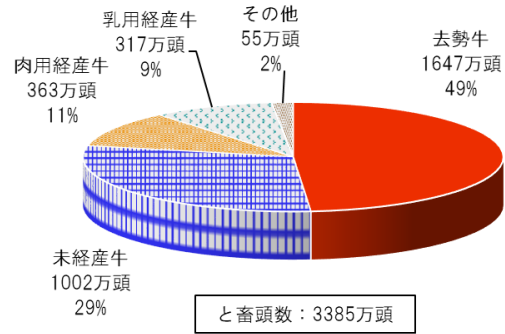
## ② 牛肉の需給動向

### ア 生産動向

2021年の成牛と畜頭数は、前年比3.2%増の3385万400頭となった（図9）。種類別では、去勢牛が同1.9%増、未經産牛が同4.1%増、肉用経産牛が同9.0%増、乳用経産牛が同1.4%増とそれぞれ増加した。なお、同年の子牛と畜頭数は、同14.2%減の39万1600頭となった。

また、21年の成牛のと畜時平均生体重量（連邦政府検査ベース）は前年比0.1%減の623.2キログラム、平均枝肉重量（連邦政府検査ベース）は同0.5%減の376.5キログラムとなった。

図9 種類別成牛と畜頭数（2021年）



資料：USDA「Livestock Slaughter」

同年の牛肉生産量（枝肉重量ベース）は、と畜頭数が増加したことから、同2.9%増の1267万7000トンとなった（表4）。

表4 牛肉需給（枝肉換算）の推移

（単位：千トン）

区分/年	17	18	19	20	21
生産量	11,878	12,189	12,317	12,326	12,677
輸入量	1,358	1,360	1,387	1,515	1,517
輸出量	1,297	1,433	1,373	1,338	1,555
在庫量	294	300	291	325	306
消費量	12,017	12,140	12,372	12,500	12,688
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	25.9	26.0	26.2	26.4	26.7

資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」  
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

### イ 輸出入動向

米国は、国内でトリミング（部分肉の成形過程で発生する脂肪分を含む端肉）が大量に発生するため、豪州などからひき材として赤身割合の高い牛肉を輸入し、トリミングと合わせて主にハンバーガー・パティ用のひき肉を生産している。また、北部ではテーブルミート用牛肉をカナダから輸入している。

21年の牛肉輸入量（枝肉重量ベース）は、前年比0.2%増の151万7100トンとなった。

輸入先別に見ると、カナダ産は42万7200トン（同14.1%増）、メキシコ産は2年連続で増加し30万6000トン（同3.6%増）となった。一方、豪州産は、同国での牛群再構築などから18万8000トン（同37.6%減）と前年に続き大幅に減少した。

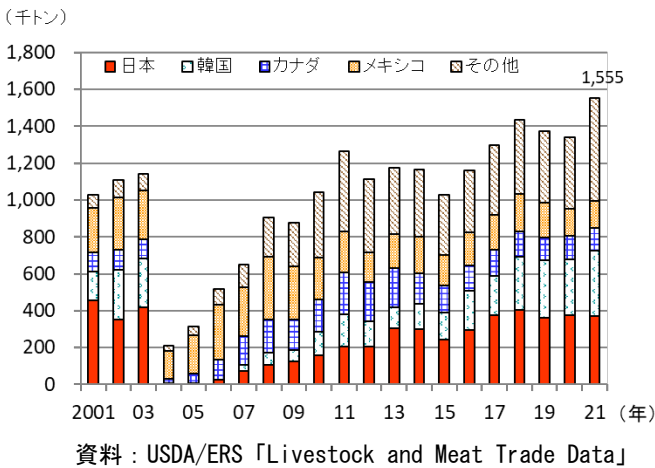
牛肉輸出量は、03年12月に米国内で初めてBS

Eが発生した影響を受け、04年に大幅に減少したが05年以降は増加基調となり10年にはBSE前の水準となった(図10)。

12年以降は、供給量の減少や価格の高騰などから伸び悩んでいたが、16年以降は好調な牛肉需要などを背景に増加傾向で推移した。21年は国内生産量が増加する中で、韓国・中国などアジア市場からの需要増などにより、同16.2%増の155万5000トンと過去最高を記録した。

輸出先別に見ると、最大の日本向けが37万1000トン(同1.1%増)とわずかに増加し、第2位の韓国向けは35万3000トン(同16.7%増)と大幅に増加した。また、中国向けは米中貿易協定第一段階合意による市場アクセスが拡大し、24万5000トン(同353.8%増)と大幅に増加した。

図10 牛肉の輸出量と輸出先の推移



ウ 消費動向

2021年の1人当たり牛肉消費量(小売重量ベース)は、前年比1.3%増の26.7キログラムとなり、1985年の35.9キログラムから下降基調にあったが2015年を底に近年は増加傾向で推移している。

③ 肉牛・牛肉の価格動向

ア 肥育もと牛価格

肥育もと牛価格(オクラホマシティー、600~650ポンド)は17年以降100ポンド当たり150米ドル台で推移し、20年は下落に転じた(表5)。21年は繁

殖雌牛の淘汰による供給減が続く中、国内外の需要増により、同5.1%高の同157.7米ドルとなった。

表5 生体牛と牛肉の価格の推移

(単位：米ドル/百ポンド)

区分/年	2017	18	19	20	21
肥育もと牛	155.8	159.2	153.7	145.8	157.7
肥育牛	121.9	117.1	117.1	107.7	122.6
牛肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	209.7	214.1	222.9	236.4	279.9
牛肉小売価格 (セント/ポンド)	590.8	592.4	604.3	653.6	724.9

資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook : Table」

注：カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 肥育牛価格

肥育牛価格(オマハ、1100~1300ポンド、去勢牛、チョイス級<sup>(注3)</sup>)は、2014、15年が高値となったものの、16年に下落して以降おおむね横ばいで推移し、21年はと畜頭数は増加したものの需要増などから、同13.8%高の100ポンド当たり122.6米ドルとなった。

(注3) 全8段階の肉質等級のうち、上から2番目の等級。

ウ 牛肉卸売価格

2021年の卸売価格(チョイス級、600~900ポンド、カットアウトバリュー)は、国内外の需要増などにより前年比18.4%高の100ポンド当たり279.9米ドルとなった。

エ 牛肉小売価格

2021年の平均牛肉小売価格(チョイス級)は、前年比10.9%高の1ポンド当たり724.9セントとなった。

(3) 養豚・豚肉産業

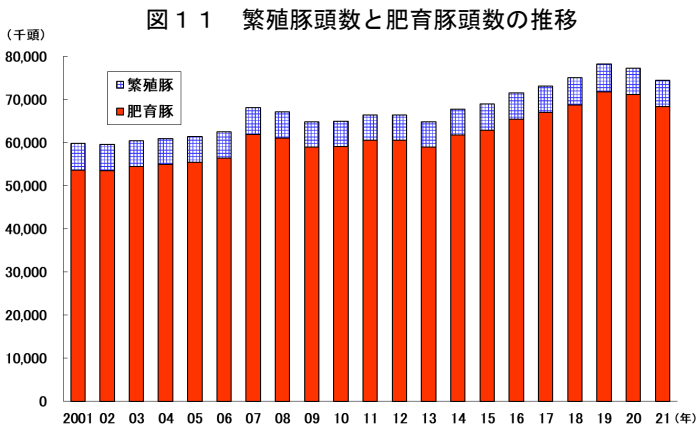
米国の養豚は、アイオワ州やイリノイ州を中心とするコーンベルト地帯を中心に、伝統的に穀物生産の副業として営まれてきた。一方、ノースカロライナ州やオクラホマ州でのインテグレーション(垂直統合)の出現は、従来の養豚産業に対して、生産・流通などの面で大きな

変化をもたらした。近年は、一部の州で環境規制や動物福祉への取り組みを強化する動きが見られる。

### ① 肉豚の生産動向

豚飼養頭数は、2010年以降はおおむね増加傾向で推移する中、13年は豚流行性下痢（PED）の発生により落ち込んだ（図11）。その後、19年まで6年連続で増加したが、21年は前年比3.7%減の7444万6000頭と2年連続で減少した。

飼養頭数の内訳を見ると、繁殖豚は612万5000頭（同0.8%減）、肥育豚は6832万1000頭（同4.0%減）とそれぞれ減少した。



資料：USDA 「Quarterly Hogs and Pigs」  
注：各年12月1日現在。

21年（20年12月～21年11月）の子豚生産頭数は飼養頭数が減少傾向にある中、1億3335万9000頭（同4.1%減）となった。なお、一腹当たり産子数は11.06頭（同0.3%増）となった。



写真4 肉豚の飼養風景

### ② 豚肉の需給動向

#### ア 生産動向

2021年のと畜頭数（コマーシャルベース）は、1億2828万7800頭（前年比2.5%減）となり、豚肉生産量は1255万3000トン（同2.2%減）と減少に転じた（表6）。

また、21年のと畜時平均生体重量（連邦政府検査ベース）は130.6キログラム（同0.3%減）、平均枝肉重量（連邦政府検査ベース）は97.5キログラム（前年比増減なし）となった。

表6 豚肉需給（枝肉換算）の推移

（単位：千トン）

区分/年	2017	18	19	20	21
生産量	11,605	11,936	12,536	12,838	12,553
輸入量	506	473	429	410	535
輸出量	2,555	2,666	2,867	3,302	3,187
在庫量	251	254	293	212	202
消費量	9,541	9,748	10,065	10,034	9,918
1人当たり消費量 （年間、キログラム）	22.8	23.1	23.6	23.5	23.2

資料：USDA/ERS 「Livestock and Meat Trade Data」

注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

#### イ 輸出入動向

2021年の豚肉の輸入量（枝肉重量ベース）は、国内生産量が減少する中、53万5300トン（前年比30.5%増）となった。輸入先別に見ると、最大のカナダが33万4000トン（同28.8%増、総輸入量に占める割合は62.4%）、次いで多いメキシコは4万7000トン（同43.0%増、同8.8%）と大幅に増加した。

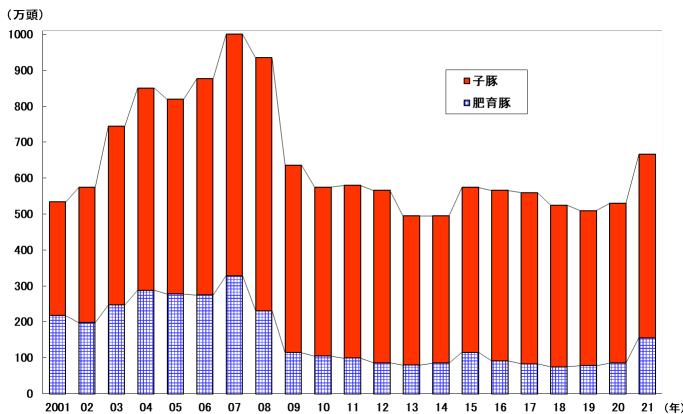
また、同年の生体豚の輸入は主に子豚であり、そのほぼ100%がカナダからである。21年の同国からの輸入頭数は、米国内の豚飼養頭数の減少などにより、666万頭（同25.9%増）となった（図12）。

輸出量（枝肉重量ベース）は16年以降、国内生産量の増加や堅調な需要を背景に増加傾向で推移していたが、21年は国内生産量が減少する中、主要輸出先である中国向けが減少し、前年比3.5%減の318

万6000トンとなった（図13）。

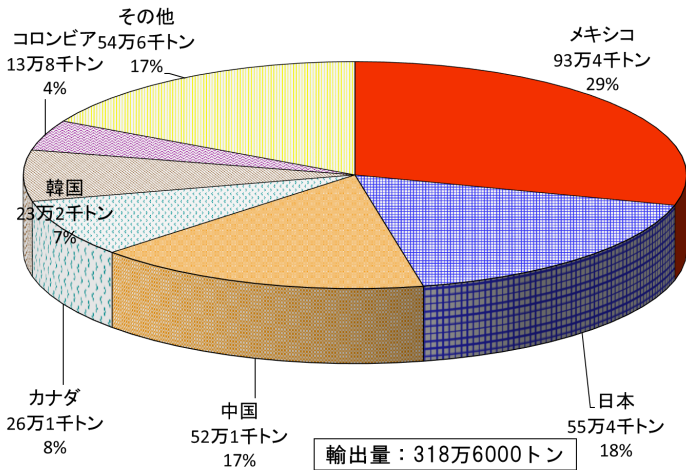
輸出先別に見ると、首位のメキシコ向けは93万4000トン（同31.4%増）、日本向けは55万4000トン（同1.8%増）と増加した。中国向けは国内生産量の回復により52万1000トン（同44.6%減）、カナダ向けは26万1000トン（同0.9%減）、韓国向けは23万2000トン（同5.4%増）、コロンビア向けは13万8000トン（同60.8%増）となった。

図12 カナダからの生体豚輸入頭数の推移



資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

図13 豚肉の輸出相手国（2021年）



資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2021年の1人当たり豚肉消費量(小売重量ベース)は、外食需要の回復などにより23.2キログラム(前年比1.3%増)と増加した。

③ 肥育豚・豚肉の価格動向

ア 肥育豚価格

肥育豚価格は、2014年にはPEDの影響による生産量の減少などにより大きく上昇したが、15年以降、上昇と下落を繰り返している。21年は国内外の堅調な需要により、100ポンド当たり66.8米ドル(前年比54.7%高)となった(表7)。

表7 肥育豚と豚肉の価格の推移

(単位：米ドル/百ポンド)

区分/年	2017	18	19	20	21
肥育豚	50.5	45.9	48.0	43.2	66.8
豚肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	84.0	76.1	77.1	77.3	103.1
豚肉小売価格 (セント/ポンド)	378.4	374.5	384.3	402.9	445.2

資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook：Table」

注1：肥育豚価格は、全米の平均価格。

注2：カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 豚肉価格

2021年の豚肉卸売価格(カットアウトバリュー)は、国内外の需要増による豚肉在庫量の減少などから、100ポンド当たり103.1米ドル(前年比33.4%高)となり、豚肉小売価格も1ポンド当たり445.2セント(同10.5%高)と前年を上回った。

(4) 養鶏・鶏肉産業

米国の養鶏産業は、飼料穀物の一大生産国という利点を生かし、生産から流通までの一貫したインテグレーションの進展により効率的な生産が行われている。また、国内では、消費者の健康志向からむね肉を中心として消費を大きく伸ばすと同時に、不需要部位のもも肉を中心に、鶏肉生産量の約2割を輸出している。

① ブロイラーのふ化羽数の動向

2021年のブロイラーふ化羽数は、国内の鶏肉需要が堅調に推移しつつも、1、2月の食鳥処理場の稼働日数が前年比減となったことなどから、前年比0.1%増の98億8219万1000羽となった。



## ② 鶏肉の需給動向

### ア 生産動向

2021年のブロイラー生産量(可食処理ベース)は、1羽当たり生体重量の増加から、前年比0.7%増の2036万6600トンとなった(表8)。1羽当たり平均重量(生体ベース)は、骨なしむね肉の需要増に伴うブロイラーの大型化などを背景に近年増加傾向にあり、21年は2.93キログラム(同0.8%増)となった。

表8 ブロイラー需給(可食処理ベース)の推移  
(単位:千トン)

区分/年	2017	18	19	20	21
生産量	18,898	19,323	19,915	20,223	20,366
輸入量	57	63	59	66	70
輸出量	3,078	3,206	3,222	3,342	3,330
在庫量	388	383	425	376	320
消費量	15,639	15,978	16,498	16,779	16,938
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	41.3	42.0	43.1	43.7	43.8

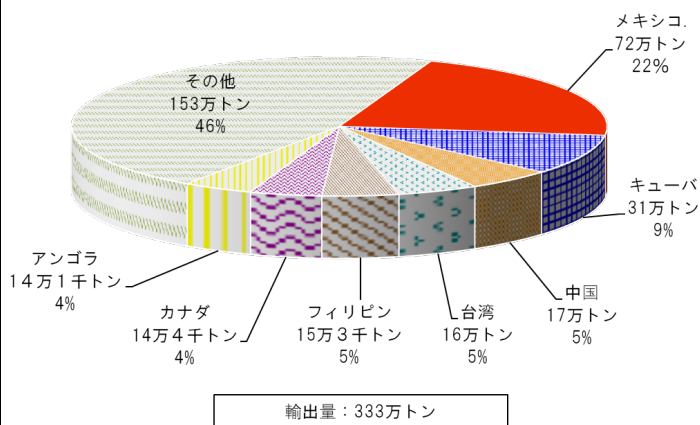
資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Outlook: Table」  
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

### イ 輸出動向

2021年のブロイラーの輸出量(可食処理ベース)は、国内価格の高騰などを背景に、前年比0.4%減の333万トンとなった。15年の鳥インフルエンザ流行に伴う輸出先の禁輸措置からは回復傾向にあり、14年比では0.6%増となった。

主要国・地域別に見ると、メキシコ向けは同2.4%増、キューバ向けは同83.0%増、中国向けは同44.4%減、台湾向けは同32.5%減、フィリピン向けは同97.2%増となった(図14)。

図14 ブロイラーの輸出相手国(2021年)



資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Situation and Outlook」

### ウ 消費動向

2021年の1人当たり鶏肉消費量(小売重量ベース)は、前年比0.3%増の43.8キログラムとなった。

## ③ ブロイラーの価格動向

### ア ブロイラーの生産者販売価格

2021年のブロイラーの生産者販売価格は、需給のひっ迫や飼料価格の高騰などから、前年比66.2%高の1ポンド当たり60.5セントとなった(表9)。

表9 ブロイラー価格の推移  
(単位:セント/ポンド)

区分/年	2017	18	19	20	21
生産者販売価格 (生体)	54.6	56.9	48.2	36.4	60.5
卸売価格 (丸どり)	93.6	97.8	88.6	73.2	97.7
丸どり小売価格	147.2	149.7	149.5	143.3	151.1

資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」  
注：卸売価格、丸どり(中抜き)の価格。

### イ 鶏肉価格

#### (ア) 卸売価格

2021年のブロイラーの丸どり卸売価格(中抜き、12都市平均)は、前年比33.5%高の1ポンド当たり97.7セントとなった。また、国内向けが主体となっているむね肉は同167.8セント(同61.3%高)、輸出向けが主体のもも肉は同54.5セント(同10.3%高)となった。

(イ) 小売価格

2021年のブロイラーの丸どり小売価格(中抜き)は、前年比5.5%高の1ポンド当たり151.1セントとなった。



写真5 小売店での鶏肉の陳列風景

(5) 飼料穀物

米国は、世界最大の飼料穀物の生産・輸出国である。飼料穀物の主力であるトウモロコシは、世界の生産量および貿易量の3割程度を占めていることから、世界の需給動向に与える影響力は極めて大きい。

① 穀物の生産動向

2021/22年度(9月~翌8月)のトウモロコシ(サイレージ用を除く)の生産量は、収穫面積、単収ともに増加したことにより、150億700万ブッシェル(3億8300万トン<sup>(注4)</sup>) (前年度比6.8%増)と前年度をかなりの程度上回った(表10)。同年度の期末在庫は、前年度をかなり大きく上回る13億700万ブッシェル(3500万トン)(同11.5%増)となった。

(注4) 1ブッシェルを25.4キログラムとして換算。

表10 トウモロコシ需給の推移

(単位:百万トン)

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
生産量	371	364	346	358	383
国内消費量	314	310	309	307	380
うち飼料向け	135	138	150	142	145
輸出量	62	53	45	70	63
期末在庫量	54	56	49	31	35

資料: USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」



写真6 トウモロコシの収穫風景

② 穀物の輸出動向

2021/22年度のトウモロコシの輸出量は、輸出価格の高騰などにより24億7200万ブッシェル(6300万トン、前年度比10.0%減)とかなりの程度減少した。輸出先別に見ると、最大の輸出先であるメキシコ向けは1688万トン(同8.2%増)とかなりの程度増加した。一方、第2位の輸出先である中国向けは1465万トン(同31.8%減)、第3位の日本向けは1015万トン(同9.2%減)と、いずれも前年度比で減少した。

③ 穀物の価格動向

2021/22年度のトウモロコシの生産者販売価格は、ロシアのウクライナ侵攻に伴う穀物価格上昇の影響を受け、1ブッシェル当たり6.00米ドル(前年度比32.5%高)と大幅に上昇した(表11)。

表11 トウモロコシ価格の推移

(単位:米ドル/ブッシェル)

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
生産者販売価格	3.36	3.61	3.56	4.53	6.00

資料: USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」